

要旨

本研究プロジェクトは、芸術において「翻訳不可能なもの」——すなわち、日常言語へ翻訳されることに抵抗するが、しかし同時に「愛情に溢れたものとして真に私に触れるもの」と私が確認したもの——に関するものである。「詩的翻訳」という手法——これは意味（論）的であり、また物質的であるだけでなく、経験的であり、省察的でもある手法である——を用い、そして「如何にして芸術作品は翻訳不可能なものを体現し得るのか」と問うことを通して、本研究は「翻訳不可能なもの」について考察し、「翻訳不可能なもの」のあり方をインスタレーション作品（本研究におけるインスタレーション作品とは、鑑賞者が作品を理解しようとする/ふれあおうとすることによって、作品に新たな意味（理解）が加わる/入ってくることを可能にする芸術の形態である）に明確に関連づけ、その内に提示するための一連の概念を発展させるものである。二項対立的なものの見方への懸念をもち、中間的でとらえがたく、微妙に異なる単一でない世界の現れや理解に私たちの意識を向けさせるような哲学的思考や思想、芸術作品などから示唆を得ながら、本研究は「私たちの知覚（認識）」や「この生きた世界に私たちが在しているという感覚」を解放し、また刺激するような芸術の詩的な働きについて考察する。

本研究は以下の事柄について、私自身が経験しそれを省察するということの往還を通して展開される——阿蘇山についての私の祖母の詩的な発語、アクリルの立方体（端材）の移ろう影、コーラ（Chora）と間（ま）は「翻訳」（トランスレーション）と「移行」（トランスファー）のための場であり翻訳不可能であるとするジャック・デリダの解釈——。従って本研究プロセスは、翻って西洋と東洋の知識、古代と現代、一元的なもの、または一つの性といったものに限定されない、様々な学問・芸術分野から共鳴する声を導き出すものであり、それらは私の芸術制作と論文執筆の両方にはっきりと表われ出ることになる。そして私の芸術作品は、私の主張（論文）を実践的に試すと同時に、主張（論文）の側にも着想を与え、そして作品と論文は共に以下の5つの主要な概念——「純粹言語」、「詩的」なもの、「影」、「うつろうこと（transference）」、「体現」——について探求するものとなる。

以下に本論の構成を述べる。本論では、先に述べた5つの主要な概念を各章で順に論じることによって、本研究の問いである「芸術における翻訳不可能なものの体現のあり方」の全容を明らかにすることを目指す。各章ではそれぞれ関連する哲学や思想、他の作家による芸術作品を論じるとともに、それらを踏まえて自身の作品についても考察を展開している。

第1章ではヴァルター・ベンヤミンの思想において、翻訳不可能であるとみなされる「純粹言語」という概念に焦点を当てながら、翻訳の哲学を探求する。これに基づき、自身の本プロジェクトにおける最初のインスタレーション作品である「Understanding of misunderstanding」を考察し、そこには「祖母の発語を逐語訳する」かのように異なる風景のイメージを繋ぐような手法があったと論じる。

続く第二章では、フリードリッヒ・ヘルダーリンの詩論、井筒俊彦の禅における言明についての哲学、リュス・イリガライの言語学と精神分析実践についての哲学について詳しく論じながら、超越論的な意味で「筆舌に尽くしがたい」（翻訳不可能）とされるものを明確化するような「言語の詩的な使い方」について論じる。その上で、私のビデオ作品「Topologies between the Three」について論じ、それが、表現と知覚（認識）の間に沈黙という暗喩的な空間性を開いていくことによって、阿蘇山についての三者間の会話を詩的に翻訳することを試みたものであったと結論づける。

第3章は、捕らえどころのない外観と知覚（認識）的な曖昧さについての、翻訳の哲学と知覚の哲学を交差する諸研究を参照し、その知見に基づいて、アグネス・マーティンや谷崎潤一郎の作品などに例が見られ、また論じられているような、芸術的なメディア（媒体）としての「移ろう影（像・イメージ）」を検討する。同時に私のインスタレーション作品、「Distancing for Opening」、「Watakushi_ame (私雨)」、「MOKUDOKU_目読」について触れ、それらの作品においても、いかに「影-光」/「光-影」といったものが、アクリルの立方体をエンボスしたサーフェス（表面）や微かに印刷された複数の像（イメージ）にまたがって、視覚的、空間的に移ろっていたかを検討する。

第4章では、「うつる」ことを示すギリシャ=ラテン語、及び日本語の派生語や語源に着想を得ながら、「うつる」ことのプロセスが「翻訳不可能なものの体現」であることを明らかにする。このプロセスでは「正（ポジティブ）」なるものが「負（ネガティブ）」なるものから現れる。これは、作品と鑑賞者の間の「距離」または「動き（ムーブメント）」において、イメージ（像）が変態し、知識が変容するという美術史的、哲学的な見解と並置されるものである。そして、コーラと間を翻訳不可能な場と捉えるデリダの解釈に応える形で制作した最後のインスタレーション作品「ここがどこなのか_ *where it is here*_ どうでもいいことさ_ *it does not matter*_ どうやって来たのか_ *how I have got here*_ 忘れられるかな_ *can I forget*」について考察し、この作品では構築した壁とその上に展開された視覚的な作品群によって——そこでは鑑賞者の経験と省察を通して、複数の間（ま・部屋）のうちに様々な像（イメージ）がうつる（映る、移る、写る、現る）——「詩的な場所」を開くことが目指されていたことを論じる。他者の凝視（gaze）を通して撮影された別の映像作品「*The Untranslatable, A Poetic Place*」では、この「詩的な場所」が開かれていく様子が捕らえられているが、本章ではそれが、祖母の発語が阿蘇山の「生命」を「うつした」やり方と調和していることを指摘する。更に本章では、愛情という意味合いでの影のニュアンスを纏う弥勒菩薩半跏思惟像と、レイナー・マリア・リルケによる生命と憧憬についての表現、コーラ（chora）は母性的であり翻訳不可能であるとする哲学的な主張などを参照し、それらの観点から「生命」について「愛と母性への憧れ、という知識（または感性）を移す（運ぶ）もの」として捉え、詳しく論じる。

第5章では、弥勒菩薩半跏思惟像や、ホカヒ（虚と空を内包したウツ）と漢字の詩（詠唱と影向が潜在的に充満する、言-寺）といった、「身体 -body-」と文字を参照し、また女性の身体をもつ芸術家（私自身）を至近距離から吟味することを通して、翻訳不可能なものの「体現」の経験が、つかの間で、感受的、生成力のあるものであることを論じる。ここでは私の映像作品「*Gesture of Shadows*（影のジェスチャー）」を振り返り、そこでは映像内の作者の影が、山から蝶へと変態を遂げている様子が外的に捕えられていると述べる。また研究の最後に行った滞在型リサーチにおいて執筆した文章を抜粋して引用し、そこで論じた芸術の出現を予期するような外的（ホカ）なものの肉体への一時的な転移（移転）を目撃することについても触れる。

芸術においては、誰もが「翻訳に抵抗するもの」と苦闘する。それゆえ、この「翻訳不可能なもの、詩的な場所」と題した研究プロジェクトは、アーティストと鑑賞者の双方のために書かれている。本論文の文脈において「翻訳不可能なもの」は、それぞれの変態しながら、私たちの世界の経験と省察をより豊かで詩的なやり方に変容させる、うつろう「命」と定義するのが最も適切であり得るだろう。それは一定ではないやり方で「うつろう」ので、芸術の詩的な働きによって——「豊穡な沈黙」を含んだ詩的な言語、空と空洞を内在化した建築的な「身体 -body-」、または母性に憧れる愛の忍耐する形において——一時的にだけ体現され得る。この体現された「翻訳不可能なもの」は、うつろう「影-光」（それは真実で、知識の獲得の上で補助となるもの）、揺らめく曖昧な像（イメージ）、震える愛のニュアンス、あるいは、開かれた「詩的な場所」として知覚（認識）され、経験されるものである。